

## 正義と共生——その原理と方法論の比較対照的考察

元 岩（東京農工大学・博士課程）

### 1、問題提起

正義とは何か。この問いは、規範と価値との関係についての再考が必要であると思われる。それぞれの生活様式において、人間は自らの価値を形成する。それが相互に承認され一定程度の社会的範囲において重要だという合意がなされたとき、それは規範へと変化するのではないだろうか。この点から、規範概念を提出する正義の概念と、人間相互の能動的な営み、すなわち共生的な営みは、重要な接点があるように思われる。この観点から、ロールズの正義論の意義と限界を吟味し、共生的視点との接点を探っていきたい。

### 2、ロールズの正義論の積極的意義と限界

ロールズの提唱する有名な「原初状態」は、彼自身も認めるように仮説的・非歴史的であるために、その抽象性を脱し得ない。また、ロールズは「重なり合うコンセンサス」という概念を提唱し、様々な価値観の多様性擁護の重要性を指摘する。この概念は、我々の価値意識相互の合意を得るための可能性を示しているが、「原初状態」に基づいて導出されているために、限界があるように思われる。また、一国内的な民主主義制度（或いは普遍主義）を前提として想定されているために、グローバルな視点での文明間の価値観の衝突を目の前に突きつけられたとき、ロールズの枠組みでは普遍的な正義の形成や実現は困難を伴うものと思われる。

### 3、マルクスの人間観と合意形成の基礎づけ

このとき、マルクス「人間—自然」「人間—人間」関係に基礎をおく人間観が重要な示唆を与えるものと思われる。このことを紐解く際に、尾関周二の議論をもとにみてゆきたい。

まず、「原初状態」下での合意形成の限界を、ハーバマスの社会理論の枠組を前提にし、エコロジックな視点を導入する仕方で尾関が提唱する「共同的共生」理念を用いて乗り越えることはできないだろうか。このとき、「コミュニケーション論的転回と環境論的転回」の概念が示唆を与えるように思われる。次に、「重なり合うコンセンサス概念」の積極面を維持するために、マルクスのいう先の関係における人間の生活様式(物質的・精神的)に基づく価値観を「環境内的な存在」として規定し、価値観の差異を積極的に承認する尾関の議論を用いてグローバルな議論にも耐えうる理論を構築できないだろうか。ある地域・民族での「共同的共生」の形成が、世界的な「共生的共同」への基礎となるという理念は、重要であるように思われる。

### 4、今後の課題

以上から、普遍性に基礎をおく「正義」「共生」と、多元的な「価値」（そしてそこから導出される「善」）との関係の考察は必要であると思われる。様々な、実践的な生活過程における価値観をどのように世界的に広め、相互承認していくか、そしてグローバルな正義を構築していくか、そのさらなる原理的考察は、今後の課題としたい。